

大橋めぐみ作 **「祖父の残した短歌」**

<前編>

(効果音) (台所。食器を片付ける音など)

原田美奈 (俳句)刻々と迫る死の影 日々重し

母 なあに、美奈ちゃん?

美奈 うん、おじいちゃんのノート。俳句や短歌でぎっしり埋まってる。

母 本当に好きだったものね。お母さんも子供のころ、よく聞かされたわ。

美奈 亡くなる前の日まで、毎日書いてたんだね。でも、この辺の歌って、どれも寂しそう…。「我が一生は悲しさだけのものなりき…」

母 あ、そこは「我が道は」と読むんだと思うわ。

美奈 「我が一生は悲しさだけのものなりき 誇りも夢も死に終わるとは」

「病む我の思いを知るか 柿ひと葉」

(音楽) (ブリッジ)

美奈ナレーション わたしの名は原田美奈。あれは2か月ほど前のことだった。わたしは、晴れて第1志望の高校に合格した。持ち前の社交的な性格で、入学式の日から友達がたくさんでき、新しい勉強もまあ面白く、わたしの高校生活はいわゆる“順調な滑り出し”ってやつだった。

(効果音) (昼休みのチャイム。教室のガヤ。机を動かす音など)

美奈 あーおなかすいた。…真弓? 今朝からなんか元気ないよ。どうしたの?

山口佳夫 真弓ったらさあ、ゆうべ「あしたの君へ」の最終回、録画に失敗しちゃったんだって。

瀬川真弓 やだあ、もう言わないでよ。本当に落ち込んでんだからさあ。

美奈 なあんだ、そんなことか。早く言ってくれればいいのに。あたしも取ったから、あした貸してあげる。

真弓 ほんと? ありがとう! 頼りになるなあ、美奈先生は。

美奈 どういたしまして。コーギー・コーナーのジャンボシュー、カスタードと抹茶の2個セットでいいから。

真弓 えー!

(一同の笑い声)

(効果音) (玄関のドアが閉まる音)

美奈 ただいまー。

母 お帰りなさい。

祖父 お、美奈か。お帰り。

美奈 おじいちゃん! いつ来たの?

ナレーション わたしは驚いた。それは数年ぶりに会った、母方の祖父の堀江源三だった。

祖父 ついさっき、お母さんに駅まで迎えに来てもらったところだよ。いやあ、随分と便利になったもんだ。群馬からたった1時間なんだからな。

美奈 ああ、上越新幹線ね。

母 あしたはね、30年ぶりにお友達と会うんですって。俳句のノートまで持ってきてね。みんなに聞かせてあげるそうよ。そうそう、あさっての日曜日、おじいちゃんはお母さんたちと一緒に教会に行くけど、久しぶりに美奈ちゃんもいらっしやい。

ナレーション わたしの両親はクリスチャンで、日曜日には教会に行っていた。祖父は若いころから独立独歩、キリスト教だけでなく、一切の宗教に頼らないことを自慢にしていたが、今回はなぜか素直に母についていく気になったらしい。わたしも実は、小学校を卒業するまでは、親に言われて教会学校に行っていたのだが…。

美奈 うーん。あさっては無理。放送部の新人は、今がメチャ忙しいのよ。コンクールも近いし、とても休める雰囲気じゃないんだ。また今度。おじいちゃん、ごめんね。

祖父 (笑いながら)おじいちゃんもな、もう今更キリスト様なんか頼らなくても大丈夫だと言ったんだが、お母さんがぜひって言うんでな。その… コンクールか、頑張りなさい。

美奈 はい。

(効果音) (電話の呼び出し音)

母 はい、原田でございます。あ、はい、ちょっと待ってね。美奈ちゃん、山口君から。長電話はダメよ。

美奈 はいはい。もしもし佳夫？ お待たせ。うん、今着いたとこだから5時なら大丈夫かな。いい？ うん、それじゃね。

(効果音) (電話を切る音)

母 出かけるの？

美奈 うん。5時に佳夫んち。真弓も一緒だって。佳夫ったらね、パソコン買ってもらったんだってー。一緒にソフト見に行くんだ。そのパソコンってね、カラオケもできるんだって。もちろんインターネットだって完ぺきだし。ゲームもいっぱい入ってるの。じゃ着替えてくるねー。

祖父 何だか外国語を聞いてるみたいだな。さっぱり分かん。

母 最近ずっとこうなのよ。忙しい忙しいって言ってるけど、結局いろんなもの追っかけ回してチャラチャラしてるだけで。ちょっとは落ち着いて将来のこととか考えてくれないとねえ…。

祖父 まあ、うちのばあさんなんか、若いころから、やれ地域の何とか委員だ、やれ何とか会だと頑張ったみたいだが、落ち着きのないところなんかはそっくりだ。

おまけに「死ぬときも一緒よ」なんて言っとったのに、わたしを置いてさっさと逝いちまうし、本当にせわしないやつだった…。あ、いや、ところでな、ちょっとあれ、聞いてくれるか。

母 あしたお披露目する俳句ですか？

祖父 (笑う) まあ、そうだ。

母 じゃ、ひとつ上手なのをお願いしましょうか。

祖父 おいおい、何だそれは。…これなんかはどうだ？

(効果音) (階段を駆け下りてくる音)

美奈 じゃ行ってきまーす!

母 あんまり遅くならないのよ。

祖父 気をつけてな。

(効果音) (玄関の閉まる音)

母 …まったく。

(効果音) (街の雑踏)

美奈 ふー、足が棒だよー!

佳夫 悪いなあ、付き合わせて。

美奈 いいのいいの。その代わりに、今度は佳夫んちでカラオケだよ。

真弓 あたし、ジャニーズのホームページ見たい!

美奈 あ、ちょっと待って。うちに電話してくるから。

佳夫 カエルコール？

真弓 佳夫、古ーい。

美奈 (笑う) …あ、お母さん？ 今終わったんだけど。え？ 病院？ …うん、分かった。カギ持ってるから大丈夫だよ。うん、じゃあね。

佳夫 病院って、どうかしたの？

美奈 ああ、おじいちゃんがね、今日群馬から出てきたんだけど、ちょっと疲れたんだか、熱っぽいって言うから、念のため診てもらうんだって。今から救急病院に車で連れてくみたい。まあ年も年だから。そんなわけでちょっと急いで帰らなきゃ。またね。

真弓 うん、あしたね。

佳夫 じゃあな。

ナレーション おじいちゃんの微熱は、やはり疲れによるものらしかった。それを聞いてわたしは安心したが、お母さんの話はまだ続いた。

美奈 黄疸？

母 そう。お医者さんがね、少し黄疸が出ているようだから、すぐに検査をしなさいっておっしゃってね。あしたの朝一番にもう一度連れていこうかと思うの。せっかくお友達に会いに来たのに残念だけど。

美奈　　そう…。

母　　　あした、学校から帰ったら、しばらくおうちにいてくれる？ 何かあったら電話するから。

美奈　　うん、いいよ。

ナレーション　案の定、おじいちゃんはとても残念がっていた。検査の結果を待っているおじいちゃんは、すっかり元気をなくしてしまっていて…。

祖父　　「旅の空に…」

美奈　　おじいちゃん？

祖父　　「旅の空に病みて悲しき 帰り雁^が」か…。

ナレーション　わたしは、こういうとき、何て言えばいいのか分からなかった。両親の教会では、みんなでおじいちゃんのためにお祈りをしたと言っていた。それから2、3日して、母が病院に呼ばれた。

母　　　すい臓ガン…ですか。

医師　　幸い今週、ベッドの空きが出ます。早速入院の手配をしますが、よろしいですね？

ナレーション　思いがけない展開にわたしは驚いた。あんなに元気だったおじいちゃんがガンで入院。それなりに平和だったわたしの家庭に、死の影を帯びた大きな黒い雲が、覆いかぶさってきた—。

<後編>

ナレーション　おじいちゃんの命は、もっても3か月ということだった。母は父とも相談して、クリスチャンとしておじいちゃんに本当のことを伝えることにし、担当の医師にも、父の動揺については責任をもってフォローするからと説得して、おじいちゃんにガンのことを告げたらしい。わたしは、おじいちゃんの気持ちを考えると、なかなか見舞いに行く気になれなかった。そんなある日—。

母　　　(階下から)美奈ちゃん。

美奈　　何？

母　　　今日、学校の帰りに病院に寄って、おじいちゃんの洗濯物持ってきてくれないかしら。たまには美奈ちゃんが行ってあげたほうが、おじいちゃんも喜ぶわよ。

美奈　　う、うん… 分かった。

美奈　　(モノローグ)おじいちゃん、やっぱり元気ないのかなあ。でもどうすればいいんだろ。

(効果音)　(病院。ノックの音に続きドアの開く音)

美奈　　おじいちゃん。

祖父　　お、美奈が来てくれたのか。珍しいな。

美奈　　洗濯物取りに来たの。具合はどう？

祖父 うん。今日は随分と楽なほうだよ。

美奈 ほんと？ よかった。何かすることある？

祖父 ああ、それじゃ…。それを読んでくれるかな？

美奈 あ、聖書じゃない。なんか懐かしい。

祖父 お母さんが置いていったんだよ。字が小さいけど、看護婦さんにも読んでもらえばいいって言ってね。今更、本を読んでも何にもならんと思ってそのままにしてたんだが、全然手を付けんのも悪いだらう。

美奈 いいよ。どこを読もうか。

祖父 美奈も読んだことがあるんだろう？ 美奈の好きなところでいいよ。

美奈 うーん。でも小さい時だったから、あんまりよく覚えてないよ。言葉も難しくて、よく分かんなかったし。

ナレーション それは、新約聖書だった。手に取ると、わたしはとりあえず一番最初にある「マタイによる福音書」というところを開けた。

美奈 ああこれ、系図の名前…。これ、パス。(何ページかめくる)

美奈 ええと、…あ、これは「主の祈り」だ。“天にまします我らの父よ”…まだ覚えてた！

ナレーション その「主の祈り」のすぐ手前の部分に、赤い線が引いてあった。

美奈 (モノローグ)お母さんかな。「あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。」(マタイ6:8b)
おじいちゃん、これどういう意味かなあ。

祖父 何だ、美奈も分からんのか。

美奈 うーん、だって、欲しいものはちゃんと買えるし、やりたいことはちゃんとやってるし、勉強もしてるし。特に神様にお願いすることってなかったもん。

祖父 やれやれ。お母さんも、随分と難しいもんを置いてってくれたもんだ。でもまあ、歌を作る以外にいれと言ってすることもないし、また時々読んでみるとするか。美奈、ご苦労さん。

ナレーション それから、わたしと母はよく病室で聖書を読んだ。わたしは、昔、教会学校で習ったところを思い出しながら、福音書のイエス・キリストのいろんな物語を、母は聖書の後ろのほうの「何とかの手紙」というところを、よく読んであげていた。

美奈 「すべて疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイ11:28)これ覚えてる！ 小学3年の時には見ないで言えたんだよ。

祖父 そりやすごかったな。ところで、これはだれに言ってるんだ？

母 「あなたがた」はわたしたちみんな、もちろんお父さんも入ってますよ。

祖父 わたしは入らんだろう。今まで神様のことなんか考えもしないで生きてきたからな。人間、死ぬときは一人だ。…でもな、こんな思いはわたし一人で十分だ。美

奈やお母さんには、元気で幸せになってもらわんと。お前たちの重荷は、おじいちゃんが代わりにしよってやるからな。

母 でもね、お父さん。お気持ちはありがたいけど、わたしたち人間の心の痛みや悲しみ、寂しさ、死への恐れ、そんな重荷を本当に負ってくださることのできるのは、神様だけなのよ。それらの重荷のもと、つくり主の神様を離れて、自分を中心に、自分一人で生きようとする、人の心の罪だからなの。わたしたちが、その罪のために、罰を受けて苦しむことのないようにと、神様はその一人子イエス様を送ってくださって、わたしたちの代わりに“十字架”という罰をお与えになったんです。イエス様は、罰を受けなければならないようなことは何一つなさらなかったのに、わたしや美奈やお父さんの罪を全部負ってくださったの。だからわたしたちは、素直にイエス様の前に出るだけでいいんですよ。お父さんがわたしや美奈を思ってくれているように、神様はお父さんを愛していらっしゃるし、今でもお父さんがその愛に気づくのを待っていらっしゃるわ。

美奈 …おじいちゃん？

ナレーション おじいちゃんは、下を向いて黙ってしまった。握った手が、小刻みに震えている。

美奈 (モノローグ)おじいちゃんは、今、心の中で闘ってるんだ。死という現実を前にして、崩れかける自分を必死で支えようという思いと、優しく呼びかけるイエス様に全部任せようとする思いの間で。

ナレーション わたしは直感的にそう思った。なぜって、わたし自身が、母の話した言葉に心を探られていたからだ。

(効果音) (放課後の校門前。「ばいばい」「じゃあね」など)

真弓 それじゃ、今日も病院に行くの？

美奈 うん。今日はわたしが聖書を読んであげる日なんだ。

佳夫 入院も1か月になると、周りも大変だよなあ。

美奈 ちよっとね。でも、最近おじいちゃんがすごく楽しそうなの。前は行くとたびに寂しそうな顔見るのがつらかったんだけど、今は具合が悪いときも文句一つ言わないで、ニコニコしてる。きっとすぐ元気になるよ。

ナレーション それが強がりではなく、本当によくなるのではないかと思うほど、おじいちゃんは明るく素直になった。心の中にどんな変化があったのか、話しはしなかったが、あの母の言葉をおじいちゃんが自分なりに受け入れたのは確かだった。

美奈 (モノローグ)さて…と。お花は昨日お母さんが持ってってるはずだから…。あれ？ うちの車だ。お母さん、迎えに来たのかな。

(効果音) (車の止まる音)

母 ああ、美奈ちゃん。

美奈 お母さん、どうしたの？

母 おじいちゃんの具合がどうも悪いらしいの。お母さんも行くから、乗って。
美奈 う、うん。
(効果音) (車のドアが閉まる音。発進音)
美奈 ねえお母さん。お母さんは怖くないの？
母 最初は「このままお父さんがイエス様信じないで死んだらどうしよう」とか、「最後に苦しんだらどうしよう」とか、もうパニックだったけど、「そうだ、わたしたちのことをだれよりも心配してくださっているのは神様なんだから、全部お任せしよう」って決めたの。
ナレーション その夜、おじいちゃんは、息を引き取った。苦しむこともなく、静かに、まるで神様が、眠っている間に天に運んでくれたような、穏やかな最期だった。
(効果音) (原田家の台所。冒頭に戻り、食器音など)
美奈 「我が道を行かんとつとに思いしを 神の道とは知らざりしかな」
「なべて皆 ^{あなた} 畢まりたる日の出かな」
「死の恐れ隠さず我に任せよと キリストの声のありがたきかな」
母 お父さん、自分のことは最期まで言わない人だったけど、イエス様を心に受け入れたことを歌に残してくれたのね。
美奈 お母さん。あたしね、来週の放送コンクール、出るのやめる。
母 え？
美奈 コンクールやめて、お母さんと教会に行くよ。まあ、ちょっとはもったいないと思うけど、おじいちゃんの歌読んでて、いろいろ考えちゃった。病気になった時のおじいちゃんを思い出すとね、神様に知らん顔したまま遊びだ部活だって走り回るのって、すごく寂しいかもしれないなあって。それが、あんなに明るく変えてくれた神様、イエス様ってすごいなって思う。やっぱ神様は、あたしたちの必要を知ってるんだね。それにおじいちゃんの歌の才能が、こうやって人生最期のときの心の中を、きちんと残してくれるのに役立ったなんて。何だか感動しちゃう。だからあたしの放送の技術もね、もし神様が使ってくれるんなら、また次のチャンスを与えてくれるかもしれないじゃない？
母 そう…。
ナレーション 母はそう言ったきりだったが、その横顔は、何とも言えずうれしそうだった。おじいちゃんのノートは最後のページに来ていた。
「苦しみに会いたるはよしと聖書の言う げにまことなり主を知りし身に」
「空も晴れ気持ちも晴れし今日の日 娘と孫に会うぞうれしき」
「あなうれし キリストのみ手に今あるを いまわの際に知りたる我は」
美奈 (モノローグ)「あなうれし キリストのみ手に今あるを…」
ナレーション わたしはその時、おじいちゃんと同じ気持ちでいる自分に気づいて、驚いた。「おじいちゃんが、わたしをイエス様に引き寄せてくれたのかもしれない。ありが

とう、おじいちゃん。」わたしは、そっと心の中で呼びかけていた。

(完)